

〔池上義信先生保管資料からの抜粋〕 その1

植物同好じねんじょ会に「池上義信先生」の植物関連資料が寄贈されたので、その中から植物に関する先生の記録や植物保護に関連する資料を掲載しておきたいと思ってい

る。「その1」として本号では「動植物名漫談」と「植物方言集」を掲載する。いずれも寄贈資料として保管しておくだけでは、知られずに死蔵の可能性が高いからである。

動植物名漫談 1942? 女学生新聞 2巻 (4号) : 16-18 掲載

故 池 上 義 信

學名を附けた魚がある。スナイデリヤは同じく魚學者の Snyder氏を記念したもので、名附親のジョルダン博士はヤマノカミを山の神様 (Mountain God) の意味に思っ
て、この醜い貌の魚に相應しい名を考えたらしいが、何ぞ
知らん、日本ではヤマノカミは妻の別名でもあり、嬋天下
で有名なスナイダー夫人を此の醜魚であてこすった様にな
ってしまった。抑々妻をヤマノカミといふのはイロハ歌で
オク (奥様のオク) がヤマの上 (カミ) にあるからだとい
ふ。こんな類に「ヘチマ」がある。色々の語源もあげてあ
る中に、「ヘチマ、一名トウリ (之は糸瓜の略或は唐瓜の
約) と云ひ、トの字はイロハ歌のへとチの間 (マ) にある
からヘチマと云う也」とはこじつけらしいが面白い。之に
な^{カラスノエンドウ}ら^{スズメノエンドウ}って烏野豌豆と雀野豌豆との中間形の野草に「カスマ
グサ」があり、近い例では牧野博士の、「カコマハグマ」
等もそうである。

鈴蟲はふる鈴の音の如く (チンチロリン)、松蟲は松風の
の如し (リーン リーン) といわれてゐたが、いつしか名
前が逆になって、今では鈴蟲リンリン、松蟲チンチロ
リン (尤も今でも昔ながらの呼び方をしてゐる處もある)。
キリ キリ キリとなくなき聲からキリギリス (今のコウロ
ギ)、機織る音の様とてハタオリ (今のキリギリス) と云
ったが、鳴く蟲の名は時代によって變ってきた。植物でも
「ムクゲ」をアサガホ、ハチス等よび (秋の七草アサガホ
は今の桔梗のこと)、菊はカハラヨモキ、オキナグサ。昔
の「ニガナ」は今のリンドウ。軒にさす「アヤメ」は今の
ショウブ、野に咲く花ショウブは「ハナガツミ」(カツミ
はマコモのことで今でも越後邊ではマコモをカツボとい
ふ) といわれ、又、枕草子等の「雁來紅」は今のカマツカ
であるなど、同じ名であっても昔と今では品がかわって
ゐるものが澤山にあり、漢字の普通に使つてゐるものでも、
例えば杜若がカキツバタでなく又燕子花も中國の飛燕草の
類であるといふ様に、蓬、紫陽花、溪孫*、馬鈴薯、澤
瀉、交讓木、楓、梓、榎、柗、敗醬及び萩、椿など、中國



【安藝・加賀・周防・駿河・美濃・尾張】(秋の蚊が吸は
ふとするが身の終) 流石に言の葉の栄ゆく國だけに今も
昔も仲々にユーモアに富んだ言葉のアヤが賑ひを秘めてい
る。今此處に生物の名で面白さうなものを若干拾ひ集めて
見よう。

「松」の字を分解して一八公と呼び、「鯉」は一列の鱗
が卅六枚 (實は不定) とて九々の呼聲で「六六魚」とい
ふ。之等は百の字から一を取去って「白壽」と稱へ九十九
歳を示し、「只」の字をくずして「ロハ」、質屋を「一六
(会せて七) 銀行」をいふ類で仲々珍妙なもので泥的の隠
語にでも出てきそうなところ。「葱」は本名を「キ」と
いひ、唯一字からとて「ヒトモジ」といふ。根を食うか
ら「ネギ」、苗を「キナヘ」、色に浅葱 (空色一青葱の
色) ・崩葱一後には浅黄・崩黄と書く。古の浅黄はうす黄
色があり、葱に似た「アサツキ」は浅之葱である。

葉も美しいとて「葉まで見る櫻」をもちって「濱で (葉
まで) 見るもの一即ち鹽たく竈」とて「シオガマザク
ラ」。又、葉 (齒) が無くて花が咲くとて「ウバザクラ」
(姥櫻) 等に至っては謎遊びのようである。

普通の蚊に「クレツクス (Culex)」といふ學名のもの
があり、蚊取線香に蚊が倒に落ちるとて學名を逆讀の「ク
セルツク (Xeluc)」 蠅を取るから「ハエトール」、痔が
癒るからヂノール、その他ナホリン、ケロリン等近頃の薬
品名には随分とこったものが續出してゐる。

米國のジョルダン博士が九州の方言を用ゐて「スナイ
デリヤ ヤマノカミ (Snyderia Yamanokami)」、といふ

では日本で當てゐる植物とは違つてゐるので、日本や中國の古い歌や詩文を讀む時等そのつもりでかからなくてはならない。

(スイッチョ)といふ聲は百姓が舌鼓をうちうち馬をシッチョ シッチョと追ふ様だとて馬追蟲といふ。(馬は止々で歩い動々で止るとは之如何—は笑話)。「クツムシ」はガチャガチャその鳴き聲を馬の轡の音になぞらへ聲そのまゝの表現の「ツクヅクボウシ」を(筑紫戀し)と啼くのだと詠んだあたり誠に風流な見立の中、捕へれば草にかみついて首がぬけても離れぬとて「クビキリバッタ」とは少々殺伐である。

今は観賞用の朝顔も昔は花も貧弱でみな種子を薬用(主に下劑)にする為に栽培した。此の稀にして貴い種子を手に入れんとて高價な牛を牽いて行つて種子とかへたので朝顔を牽牛子(花)といふのである。元來我が國には「ン」の字が無かつた為、之を「ケニゴシ」と書き歌にさう詠んできた。又、中國では絹を用ゐて西域の良馬と交易をしたことがあつたので、今でも絹をはかるに一匹二匹といつてその名残を留めてゐる。

「九官鳥」が中國からはじめて渡來した時にその唐船に九官といふ人がゐて「九官々々」とくちまねさせ、此の鳥は桁口で自分(即ち九官)の名を呼ぶと云つてゐたのを通譯が自分とは鳥自身の事と思ひ違へて「九官といふ鳥だ」と誤り傳えた為九官鳥といふ名になつてしまつた。

「五位鶯」は醍醐天皇の勅命に服して五位の位を貰つたと云ふ傳へであるが、之は平家物語であり謡曲に謡われてゐる事であるから先生におききしたがよい。



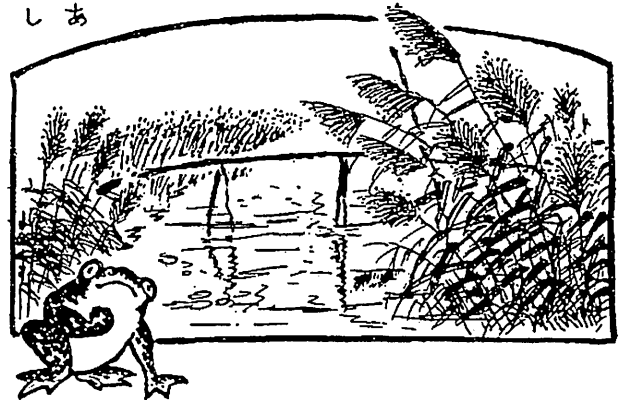
昔中國で非常に物忘れであつた茗荷といふ人の墓に妙な草が生出したので之を「メウガ」と呼んだ。或る宿屋で客が持物を忘れて行くようにと、茗荷づくしの料理を食べさせたら翌朝客は一切の物を忘れて飛出し、主人が喜んでみると、客は途々忘れ物を思い出しては次々とみんな持歸つたが、遂に宿賃だけは思ひ起こさぬとみえて拂ひに歸らなかつた。メウガを食ふと物忘れをすと云ふがそんなことはない。

「カヘデ」は蛙手の訛で葉形が蛙の手に似てゐるからである。斯様な可愛い、形の、秋まっかに染るカヘデは中國

には見られぬから、楓槭樹等の漢字をあて、はゐるものゝ、それはみな別物なのである。中國では紅葉といへば大抵此の楓(フウ)のことで之は我が内地では栽培の他野生はなく、清流に垂下る日本のかよわいかへデの美しさ等とは全く趣を異にしてゐる。杜牧の詩にある「停車坐愛楓林晚」をはじめ中國で紅葉をうたつたものを我が内地のカヘデ林の雅趣を以て賞翫しては眞の妙趣も窺はれまい。

「ラン」といへば葉の細い春蘭等と極つてゐるが本來中國で蘭といふのは、乾かすと大變に香のよい菊科のフジバカマの類である。滿洲の皇室の御紋章に用ゐられてゐるものは之であるから花瓣も五枚で、特異の六花瓣をもつ春蘭の花にあはない。後には蘭草、蘭花と両者にわけたが春蘭等所謂吾等の蘭は蘭花の方に入る。蘭花でも花と香本位の中國蘭花に較べて、清楚な姿を主に花は副の日本の蘭は香氣の少いものが多いのに、卓上の一鉢の蘭花が室一ぱいに蒸るかの如く詠んだもの等蘭は蒸るものとの中國流の先入觀念からくる型式である。

しあ



「アシ」は悪しに通ふとてヨシとも云ふが、「アシ」「ラギ」「ススキ」は皆別物で、ススキは乾いた山地に大きな叢をなし、アシは汀に亂雑な葉を茂らせて穂色も濼く、ラギは沼や小川の岸にまばらに並んでふさふさとまつ白な穂を擧げてそれぞれに特異な風韻をもつてゐる。同じアシでも「葭」「蘆」「葦」と字を使ひわけて幼生、老生をわかつ程微細に自然の雅趣を汲みとつた古人になつて近頃の人達もこれら微妙な景觀の描寫にはアシ、ラギ、ススキのもつ風韻をよみとるだけの自然観賞眼をもつてほしいものである。左様に自然の息吹の觀照に忠實であれば竹に木をついだやうな感じの歌や大自然の姿に反した不自然な繪なども描く人もなくなるのであろう。

正月に飾る「ホンダワラ」は浮囊を米俵にみたてて穂俵といふのであるが、昔三韓征伐に海上で馬糞にあてたとて神馬草とも云ふ。ジンバサ、ギンバサ、ギバサの方言はこ、から出ている。

東北地方は發音が異つてゐて、白皮をスラカンバ、濱梨をハマナスといふことから「シラカンバ」「ハマナス」といふ名が出たといふ人もある。「ハス」はハチスの略で窩だらけのうてなを蜂の巣にみたてたのは面白い。七遍窠に

入れても炭にならぬとて「ナナカマド」といひ、千遍振出してなほにがくて薬効があるとて「センフリ」といふ。

或る蛇に咬まれるとその日ばかりの命とて「ヒバカリ」と呼び、臺灣には咬まれると百歩歩かぬうちに死ぬとて百歩蛇といふのがゐる。然し本物のヒバカリには毒はない。

音便通音約音訛等からきてゐるものは数限りがない。カウゾ（紙麻）ゼンマイ（錢巻・錢舞）カシハ（炊葉）ナスビ（中澁（酸）實）ドングリ（椽栗）ヒノキ（火之木）オホバコ（大葉子）マンサク（先咲）カウタケ（皮茸）ドクダミ（毒痛）イタドリ（疼取）ナンジャモンジャ（本物は

樟、何でふ物ぢや）クジラ（口廣）ムカデ（對手）ヤステ（八十手）セミ（脊見）ウナギ（胸黄）アラダイショウ（青大蛇）ホタル（火垂、火照）サソリ（螫針）（中略）等々。

「スズラン」（君影草）の外國名直譯「谷間の姫百合」の美名に百合の花を想像した歌人もあった。又、朝鮮ゴマ、花ワサビの方言に禍されて毒草をゴマ、ワサビの代用に供してあつたら命を落とした者もあるから出鱈目にうかうか名前もつけられない。動植物の名には異名や方言も非常に多い。

植物方言集（越後刈羽郡内郷村） 1934. 1. 7 呈牧野博士

故池上義信

五十音順（左方言、右和名）

- | | | | |
|-------------|---------------------------------|--------------|-------------------------------------|
| 1. あつきなべ | カンアオイ類 花の状況から略して
単になべともいう | 29. さるずみ | ミヤマガマズミ |
| 2. あつきゆり | オニユリ 花卉の斑点より | 30. じじばな | シュンランの花茎 |
| 3. あなうつぎ | ウツギ | 31. しーじんばな | ヤブカンゾウ |
| 4. あおき | シロダモ | 32. しゃみせんぐさ | ナヅナ |
| 5. うのはな | タニウツギ | 33. すもうとりのき | ミズキ |
| 6. おとこがたこ | キクザキイチリンソウ | 34. ぞーっぱ | タニウツギ |
| 7. おとこゆり | ヤマユリ | 35. だいまょうだけ | ナリヒラダケ |
| 8. おにぜんまい | イノデ | 36. だいおう | マダイオウ |
| 9. おほづつ | オトコエシ | 37. たうえばな | タニウツギ |
| 10. おんなゆり | コオニユリ | 38. たもぎ | トネリコ |
| 11. おんばこ | オオバコ | 39. ぢしゃ | エゴノキ |
| 12. がざ | タニウツギ | 40. ちちゃかけ | ヒサカキ |
| 13. かつぼ | マコモ | 41. どうのすね | タニウツギ |
| 14. かるかや | オミナエシ | 42. どうにけ | カリヤスモドキ 節の折れところから
胴抜けの意と |
| 15. きつねつばき | アオキ | 43. とどがら | タケニグサ |
| 16. きびがら | ナリヒラダケ | 44. どろ | ヤマナラシ |
| 17. きんやなぎ | キンシバイ | 45. とんぼぐさ | ツユクサ |
| 18. くさまき | アスナロ | 46. なぎ | コナギ |
| 19. くわしまめ | ツノハシバミ | 47. なべ | カンアオイ属 |
| 20. くわじばな | タニウツギ・ウツボグサ 火事花と
て家の中へ持込みを嫌う | 48. ねこじゃらかし | エノコログサ類 |
| 21. げえるっぱ | オオバコ 蛙っ葉の意 | 49. はぐさ | メヒシバ |
| 22. けんぼ | ケンボナシ | 50. はなのき | イタヤカエデ |
| 23. こうこのき | ネムノキ | 51. ひよっこぐさ | ハコベ |
| 24. こくでのくわし | トウモロコシ | 52. おす | ノブドウ 刈羽村（全郡）にてはアオ
ツツラフジのことをおすという |
| 25. こめごめ | ムラサキシキブ | 53. ぶんどう | エビヅル |
| 26. こめばな | シモツケ | 54. ぶんぶくちやがま | ナツハゼ |
| 27. さいき | ウドトラシ | 55. へいちく | ネマガリダケ 又へいちくだけという |
| 28. さわら | アスナロ | 56. へんびゆり | アマドコロ |